9/10
朝日

原発事故 ないと思っていた

主婦
（福島県 55）

大震災の翌日2011年3月12日早朝、サイレンが響き渡り、福島県浪江町の防災無線が緊急避難を呼びかけた。東京電力福島第一原発の事故だった。着の身着のまま、飼い猫さえ置き去りにして夫の家族と2台の車に飛び乗り、町内の避難区域に車を走らせた。

すぐに東京に避難したが、13年にいわき市に移住した。娘が福島に帰りたいと訴え、福島で働く夫と合流したのだ。だが認知症の母は病状が悪化し、市内のグループホームに入所することになった。

浪江町は全域が避難指示区域とされ、義父や3人の友人のほか、多くの親戚や知人が生まれ故郷に戻ることなく他界した。この1年で数回、自宅に一時立ち入りしたが、人のいなくなった町は雑草が生い茂り、無人の家屋は朽ち始めている。

町は来春の避難指示解除に向けて急ピッチで除染作業をしている。うれしい半面、悲しくもある。町に、にぎわいは戻るまい。閑散とした町を風だけが吹き抜ける光景が目に浮かぶ。

私の県の原発に限って、事故なんて絶対に起きるはずはない。私も、以前は同じように思っていたが……。

福島離れて転々 無念の亡夫

無職
（栃木県 85）

「原発が危ない」と思って、大震災翌日の2011年3月12日朝、福島県双葉町の自宅から夫婦で避難した。夫は85歳、私は80歳だった。県内、埼玉県、栃木県の計7カ所を転々とした。老いていく身の前途を思うと、不安ばかりが募った。

思えば46年前、結婚を機に私の生まれ故郷の双葉町に一軒家を購入した。「穏やかな町で一生を終えられる」と夫婦で喜び合った。それから約40年、突然襲ってきた大地震と安全なはずだった原発の大事故。「晩年になってこんなことに……」と、夫婦で肩を落とした。

何度か一時帰宅したが、我が町や自宅はどんどん廃れ、もう帰れないと思うようになった。2年前、私たち夫婦と同じように双葉町から避難してきた孫家族と、栃木県内に家を買った。ほっとできると思った矢先の昨秋、夫が肺炎で亡くなった。

この5年間、家に戻れず、異郷で悲しい別れをした人は数知れない。それぞれ無念な思いがあったろう。一周忌法要は夫の故郷である福島県いわき市で営む。「懐かしい故郷の山河を見て欲しい」と願うばかりだ。